

# Book Review

## 補綴臨床別冊 力を診る ―歯列を守る力のマネジメント―

市川哲雄・森本達也・熊谷真一 編



Reviewer

木暮隆司 Takashi Kigure

(東京都・木暮歯科クリニック)

『力を診る』。読み手として目が留まる斬新なタイトルである。その力によって臨床ではどれほど治療に苦慮しているか、多くの歯科医師は身をもって経験しているはずである。歯・歯列に加わる力の為害性から引き起こされる結果・経過は、さまざまな様相を呈する。よって、力が関与しているとの認識はあっても、具体的にどう口腔内を診て対応すべきか、臨床で迷うことは多々ある。

個の多様性もあり、焦点が絞りづらいテーマに対して、多くの症例を提示し系統立ててまとめている書は、いままでになかった気がする。臨床家にとっては待望の書であり、編者の先生方に敬意を表したい。

本書は、4パートに分かれ構成されている。

パート1では、臨床経過が物語る力の影響について、その要素を上げ、臨床統計加えることで、より具体的に明確化している。リスクファクターと言われるゆえんについて、その原因論から考察を与えている。力を考慮した

病態診断の重要性がうかがえる。

パート2においては、その力について研究面から解説を加えている。力が加わった場合の生理、生体反応その変化についてのメカノバイオロジー、バイオメカニクスについて理解を深める内容となっている。口腔内の変化を診る臨床家にとっても力に対する見方が変わってくるであろう。また、見えない力をより具現化する咬合検査法(咬合接触状態、咬合圧分布など)は、治療指針の一助に成りうることを紹介している。

パート3では、口腔内で生じている現症からどう読み取れるのかを解説している。歯・歯肉・歯列の変化、顎位の変化、骨の改造にわたり、臨床の視点を掲げ、それが機能によるものか、加齢によるものか、あるいは過大な力の影響によるものか考察している。また、Q & A形式で構成されている点は、たいへん読みやすく理解しやすい。若い歯科医師が現在治療している患者さんに照らし合わせて、その項目を拾い読みしても良いかもしれな

い。口腔内で起こっている現象に説明を加えられる発見があるかもしれないし、観察から得られる臨床情報の重要性に気づくであろう。

パート4では、実際の臨床においてその力をどう判断して対応したかを紹介している。問診から得られる情報や臨床経過を提示し、力に対する多方面からのアプローチ例は、われわれの臨床に役立つ内容と思われる。歯周治療、欠損補綴、総合的な知識と技術、経験がないと成しえない治療であり、高度にも思えるが、大家の先生方の卓越した臨床視点が汲み取れる。

確実な治療をしたにもかかわらず、補綴物が壊れたり歯が失われていく背景には、力の要因が多分にある。本書を読まれば、力という概念から自分の症例を顧みる機会にもなり、新たな視点が生まれると思える。また、いまだ多くの臨床経過をもちあわせていない歯科医師にとっても、治療技術と同時に得ておきたい知識が豊富に掲載されている書である。お勧めしたい必携の一冊である。